

自立心の強い山城生との思い出

旧職員 奥村正男

私の教員生活の三十七年のうち、ほぼ三分の一近くを山城高校勤務で過ごさせてもらった。なかでも、卒業学年の担任を四度も持つことが出来、三年連続卒業生を送り出したことも忘れられない。平成に入り、所謂第二次ベビーブームの到来となり、一学年の生徒数が五百七十名にも及ぶ超マンモス規模となり、朝の登校時に見る自転車通学のラッシュの凄さは物凄い過密ぶりであり危ないなどという段階を越えていたように思う。

私の担任していた平成元年、二年時の生徒たちのタイムカプセルなるアンケートを紐解くと、興味深いのは、部活に入っていた生徒が五十三%と実に二人に一人はクラブの活動歴を持ち、山城の生徒の部活の活発さが際立っていたように思う。また、思い出に残る場所は、という問い掛けに対しては、HR教室と答えた生徒が三分の一を越え、クラス内の人間関係の和や

かさも推定され、陰湿ないじめ騒ぎで語られる学校とは様相が異なっている。

在職時に大変印象深い出来事として、阪神タイガースが十八年ぶりの優勝、日本一の栄冠を手にした年、監督であり、また山城のOBでもある吉田義男氏が生徒たちの招きに応じて講演に来られ、後輩とのさわやかトークを披露されたことはよく覚えていいる。翌日の日刊スポーツ紙でも大きく報じられたことも印象を強く残している。正月のサッカー選手権大会での決勝進出、始業式を終えると脱兎のごとく東京に向かい、国立競技場での国見高校との決勝戦の応援に出かけ、生徒の伸び伸びとしたプレーに感動したことも記憶に強く残っている。

先日、『月刊現代』十月号に「受け継がれる志」という特集記事に、山城OBの吉田義男氏、浜村淳氏、釜本邦茂氏の三人の対談が掲載されていたが、その結びに浜村氏が「先生と生徒が長閑（のどか）な関係やったんですなあ」と語っておられたが、私の記憶でも他校勤務にはない結びつきを感じさせられる場面は何度も体験させられた。その要因は、生徒の自立心が強く、山城祭やその他の行事などの殆どで教師依存から抜け出し、自分達で計画、統御する姿勢を見せ、そのレベルも質的にはかなり高いレベルに達していた。進路の面から見ても、大学そのものを目的化するケースが多い中、私のクラスの生徒たちの多



須磨海岸にて

くは、将来を見据え、司法、医療、教育、芸術メディアなどのそれぞれの思いの道へと進み、今も活躍してくれている。彼らとは引き続き交流させてもらっているし、むしろ教えられることの多い日々を楽しく過ごさせてもらっている。山城高校の一層の発展、教え子たちの大活躍を心から念じている。